

【親鸞（中学）部門・最優秀賞】

僕が生まれたこと

札幌大谷中学校 第1学年 堀 有我

僕はひとりっ子である。幼児の頃何度も母に「弟か妹がほしい。」と頼みこんだものだ。その度に母は苦笑いしていた。兄弟のいる友だちがうらやましかった。

十歳の僕の誕生日に、母が告白した。「ママね、ゆうがにずっとウソついてたことがあるの。ママ二十歳も歳をごまかしていたの。だから本当は、お友だちのおばあちゃんくらいの歳なの。ごめんね。」と。

僕は泣いた。祖母や祖父はとうに他界していて、父は五十代後半だった。若いママと結婚したと信じていたが父と母は同じ歳だった。祖母が亡くなった時、母は若いから僕が大人になっても元気なんだと当たり前と思っていた。なんでこんな？ どうして？ と思った。

二十代で結婚した両親だが、ずっと子供がいなかった。母は、自分のせいだと悩んでいたが、子供がいなくとも楽しい人生をと父と話し、犬を飼い、家も建てた。でも母はどうしても子供が欲しいと東京に毎月二度クリニックに通った。そんな時、父の父親が八十三歳で他界した。母は、なんだか赤ちゃんができる予感がしたという。そして妊娠した。妊娠一日目を病院で調べたところ、それは父の父親の命日だった。こんなことあるのかと母はおどろいたが「きっと男の子だわ。」と確信したらしい。そして僕が生まれた。会えなかったが祖父の生まれ変わりと言われたらしい。

母は友人の親よりも年上だ。小学校の頃は、校長先生よりも年上だった。だから、すぐ疲れる。腰も痛がる。老眼鏡がないとメニューすら見えない。それでも母は僕を産んだ。ギリギリセーフだったと笑っているが、もしかすると命がけの出産だったのではないかと思う。「ママが死んだらこれ、よろしくね。」とかすぐ言うのはウザイが、本心は、とにかく長生きしてほしい。まだ十二才の僕は本当に願う。そしてギリギリセーフで僕を産んでくれてありがとう。と心から思う。